『太平記要覧』覚書

長坂成行*

要旨

『太平記』のような長編の作品の場合、内容を要約したダイジェスト版が想定されるのだが、従来紹介されている資料は古態本を底本にした『太平記抜書』だけであった。ここに粗述する西尾市岩瀬文庫蔵『太平記要覧』は貞享五年の版本で、ありふれたものと思われるのだが、他には神戸大学蔵本が知られるのみである。本書は『太平記』の流布本をもとにして、全章段の筋書を四巻八冊に抄出している。『太平記』の本文そのものを残しつつ内容を摘記し、また和歌・落首など韻文類をほとんど採録しているのが特徴であり、近世初期における『太平記』享受相の一端を示す資料として紹介する価値はあろう。

一、はじめに

標題の書はその名のとおり『太平記』を要約したもので貞享五年（一六八八）の刊記をもつ版本である。例えば日本古典文学大系『太平記 二』付録の「参考文献」[1]や日本古典鑑賞講座『太平記　曽我物語・義経記』（角川書店）の「研究史物語」（釜田喜三郎）に書名は挙げられるものの、その具体についての言及はなく、博捜を究める加美宏氏の一連の享受史研究（『太平記享受史論考』・『太平記の受容と変容』他）の中でも触れられていない。『国書総目録』（五・四七七頁A）によれば、本書は岩瀬文庫と大橋図書館のみの蔵、しかも後者は関東大震災で焼失の由、[2]従って前者のみの存在かと考えていた。はるか以前に西尾市岩瀬文庫で本書を閲覧・撮影して以来気にかかりつつ放置したままであり、この間管見の限りでは本書についての報告はないようだ。このたび、神戸大学人文科学図書館に寄贈された故釜田喜三郎氏の旧蔵書を閲覧した折、『太平記要覧』にも接したのでこの機にあらあらと紹介を試みる。

今のところ本書に写本はないようで、西尾市岩瀬文庫・神戸大学人文科学図書館に貞享五年の刊記を持つ版本が蔵される。ただし後述のように両者は同版ではなく、一部相違がある。以下、岩瀬文庫本[3]により書誌を示す。架蔵番号：8808・112（函）・61（号）、全八冊。紺色表紙（二七・〇×一九・二糎）の左上に短冊形単郭題簽（一八・七×三・

2009年9月17日受理　*文学部国文学科教授

九糎）を貼り「太平記要覧　元末　一」とある（一冊目は剥落甚し）。楮紙袋綴（五目）。各丁の匡郭は四周単郭（二二・三×一六・二糎）。柱刻は無郭、「要覧　○（丁数）元」とある。冒頭にある太平記序（蒙竊採古今之変化…）は一面表の半分までの八行（字詰一行二〇字）、太平記要覧叙は一面八行（一行一七字）、目録及び本文は一面一二行（一行二四字）、跋は一面八行（一行約一五字）。用字は漢字片仮名交、付訓片仮名、返り点・読点あり。目録では章段名の下に開丁の数を記す。本文中の章段名は二字下げで○を付す。巻一「中宮御産御祈之事付後基偽籠居事」の欄上に「元亨二年ヲ乱ノ始トシテ貞治六年マテ凡四十六年」とあり、この巻の「頼員回忠事」の章段名の下に「▲自リ元亨二年／三年目ノ事」とする。以下、故事説話の段などを除いた大部分の段に、元亨二年を起点とする年数注記がある。各冊一オ（目録の丁）右下に「岩瀬文庫」（縦長長方形〔四・〇×一・五糎〕朱文・陽刻）の印を押す。

全八冊の構成（元亨利貞と数え、各巻本末あり）は以下の如し。

第一冊：太平記序（半丁）、太平記要覧叙（一丁）、系図[4]（南北両朝系図・新田足利之系図・足利之系図・北條九代系図）（二丁）、太平記要覧巻之元本目録（二丁）、巻一から巻五までの内容（柱刻一～二八）

第二冊：太平記要覧巻之元末目録（三丁）、巻六から巻一〇まで（柱刻二九～六二）

第三冊：太平記要覧巻之亨本目録（二丁）、巻一一から巻一五まで（柱刻一～三九）

第四冊：太平記要覧巻之亨末目録（三丁）、巻一六から巻二〇まで（柱刻四〇～八五）

第五冊：太平記要覧巻之利本目録（一丁半）、巻二一から巻二五まで（柱刻一～二二）

第六冊：太平記要覧巻之利末目録（二丁半）、巻二六から巻三〇まで（柱刻二三～五二）

第七冊：太平記要覧巻之貞本目録（二丁）、巻三一から巻三五まで（柱刻一～三三）

第八冊：太平記要覧巻之貞末目録（二丁）、巻三六～巻四〇まで（柱刻三四～六四）、跋文（一丁）、刊記

本文は柱刻で数えて合計二六三丁となる。

つぎに岩瀬文庫本と神戸大学本との相違点をあげる。岩瀬文庫本は第一冊のはじめに「太平記序」があるが、神戸大学本では順序が異なり「北條九代系図」の次丁に「太平記序」が置かれ、その後に目録が来る。また第八冊の末尾、岩瀬文庫本は「中夏無為ノ代ト成テ目出タカリシ事共ナリ」の後に「太平記要覧巻之四大尾」という尾題があり、次の丁に跋文があり、最後に貞享五年の刊記がある。神戸大学本は「中夏無為ノ代ト成テ目出タカリシ事共ナリ」の後に尾題・跋はなく、同じ丁に刊記が置かれる。また要覧叙の付訓や返り点にも微細な異同がある。叙の末尾、岩瀬本に「貞享五天龍集戊辰」とある部分、神戸大学本は「貞享五天龍戊辰に集る」と読ませる送り仮名を付す。どちらが先行するものかの判断は難しいが、版の修訂が行われ神戸大学本が

序の位置を替え、跋文を省いたとみるべきだろうか。

なお岩瀬文庫本第二冊目の巻七の途中は、丁付三四・三六・三五の順に誤って綴じられており、三四ウの匡郭の左下に「三十五ト三十六ト入違ニナル」、三五オの同じく右上に「三十六ト入違ニナル」と朱書される（この錯簡が神戸大学本にもあるか否かは未確認）。

二、序跋から

本書刊行の経緯は太平記要覧叙および跋からうかがえる。まず叙を読み下しで示す。

太平記要覧叙

英雄の心倦まざるの体は主将の道也なり。危を持ち顛を扶け、素を抱て事を諫む、貞臣の法也。人情忍ざる所の者有り。匹夫辱しめられ、剣を抜て起ち、身を挺て闘ふ。此れ勇とするに足ざる也。粤に我が邦の玄恵法印太平記論議閎贍なり。古今の治乱具に詳備せり。文武を備ざる者は、何を以て善の目を為んや。戦陳は儒者の事に非るを以て疑ふこと有り。古は文武の教なり。孤矢を有生の初に垂れ、躾御を幼学の際に習ふ。皆武備の設と為す也。吾が友一二子太平記熟読玩味して、茲に年有、治乱推明にして毎に人の為に説く。其身其間に履めるが如し。而して聴く者暁然として目の見るが如し。故に学者おもへらく終歳太平記を読むとも一日公の論を如かざる也。著す所の太平記要覧、是も亦初学の資けとして、梓に縷て世に行ふ。余不敏なりと雖も請ふ

これが為に序す。貞享五天龍集戊辰孟春下浣。／雒東木村雲任子

これによれば、友人一二子が初学の者のために著した本書の刊行に際し、洛東の木村雲任子が請われて叙を記したというのである。貞享五年（一六八八）正月下旬の時点では、『太平記』は、古活字本はもとより整版本も何度か刊行されており、後で触れるように本書の底本はそれら流布本によると思われる。また叙の内容にとくに目新しいことは見られない。『太平記』の成立に関して玄恵法印の名が挙げられるのは、『難太平記』（貞享三年〔一六八八〕）および『太平記秘伝理尽鈔』（正保二年〔一六四五〕か、これ以前の刊か）であるが、両者ともにすでに整版本が刊行されておりそれらに依拠するものだろう。なお木村雲任子の伝は未詳。(5)

つぎに八冊目末尾にある跋文も訓読を示す。

従来刊り行所の太平記四十巻、文鍛有錬多く見博く聞く、支分節解して一成一鮫、謂つべし心を用ることの力めたりと。然れども簡編浩博、視者往々に此を等長物に附す、是に於て一二の同志、相偕に私かに其の枢要を摘て、釐めて四帙と為し、以て一覧に便す、目して太平記要覧と曰ふ、蓋し書を読は其の要を得ん事を欲するの之意也、近頃刻刷氏来て、此れを梓に鏤を請ふ、同志相偕

に之を辞すれ共猶止ず、強弁に耐へ叵して、其の求に応ずと尓云ふ

皆貞享四強圉単閼仲秋日

丹之波州　黒井　岸氏　友治

編次　　岡村氏　壽庵

夢月堂　露白

貞享五戊／辰年仲春吉旦

雒陽書林　八尾市兵衛梓

川勝五郎右衛門刊

要約すれば以下のようになろう。太平記四〇巻はよく練られた作品だが、あまりに浩瀚なため、往々にして読者は倦まざるを得ない。そこで私的に一二の同志がその枢要をまとめ四帙に要約し、太平記要覧と名づけた。書物を読むとはその要点を知ろうとすることだ。近時、書肆に上梓を慫慂され辞退したが、断りきれずここに刊行する次第である。貞享四年（一六八七年〔強圉は丁、単閼は卯〕）八月は、太平記要覧叙の年紀の前年である。叙とも併せ考えると、本書は貞享四年八月に完成し、翌五年正月に木村雪任子が叙を記し、二月に京都の書肆八尾市兵衛・川勝五郎右衛門[6]の手で刊行されたものとなる。叙に言う一二子とは、著者の丹波黒井（黒井は地名で、兵庫県氷上郡春日町黒井か）の岸友治、及び編集に関与した岡村壽庵・夢月堂露白らをさすものと思われるが、著作に関与したこれらの人物の経歴については未詳である。

三、『太平記要覧』の編集方針

本書の編集のあり方を二、三の例で説明する。翻字に際し、振り仮名は略し、旧漢字は常用漢字に改めた。漢文表記、読点はもとのままとする。なお本書の比較の対象として、古態本に依拠した筋書の要約本である『太平記抜書』[7]を取りあげる。

よく知られた笠置での後醍醐天皇の夢の段について。

○主上御夢事付楠事　▲自元亨二年／十年目

元弘元年八月廿七日、主上笠置へ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル、当寺ノ衆徒ヲ始、近国ノ兵共馳参ル、サレドモ大名ハ一人モ不参、主上思召煩ハセ給テ、少御目睡有ケル御夢ニ、紫宸殿トヲボシキ地ニ常盤木アリ、南ヘ指タル枝殊ニ蔓タリ、童子二人来テ曰、今天下ニ御身ヲ可被隠所ナシ、但シ此木ノ陰ニ、暫御座候ヘト告テ天ニ上リヌ、主上御夢ヲ文字ニ付テ御料簡アルニ、木ニ南ハ楠ト云字也、主上不思議ニ思召夜明ケラハ成就房ノ律師ヲ召レ、若此辺ニ楠ト云ル、武士ヤ有ト問セ玉ヘハ、近キ傍ニハ不承及候、河内国金剛山西ニコソ、橘ノ諸兄公ノ後胤楠多門兵衛正成トテ名ヲ得タル武士候ト被申ケレハ急キ楠ヲ被召ケリ、主上勅定有テ、勝事ヲ一時ニ決シ、太平ヲ至サン所存可申トアリケレハ、正成畏テ天下草創ノ功ハ武略ト智謀トノ二ツニテ候、モシ勢ヲ合テ戦ハ天

下ノ兵ヲ集メテ、武蔵相模ノ両国ニ対ストモ勝事ヲ得難シ、若謀ヲ以テ戦ハヽ、利ヲ摧堅ヲ破ル内ヲ不出候、正成一人未生テ有ト被聞召候ハヽ、聖運遂ニ可被開ト被思召候ト申正成ハ河内ヘゾ帰リニケル、

見るように読点を入れて約四四〇字でこの段を紹介する。古典大系の当該章段では一二〇〇字余であり、大雑把に比較して約三分の一に減じている。どのように抄筆しているかといえば、改めて冒頭の二行（傍線部）を示す。

元弘元年八月廿七日、主上笠置ヘ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル、〔1〕当寺ノ衆徒ヲ始、近国ノ兵共馳参ル、サレドモ〔2〕大名ハ一人モ不参、〔3〕主上思召煩ハセ給テ、少御目睡有ケル御夢ニ、

『太平記』原文では〔1〕に「始一両日ノ程ハ武威ニ恐レテ、参リ仕ル人独モ無リケルガ、叡山東坂本ノ合戦ニ、六波羅勢打負ヌト聞ヘケレバ」が、〔2〕に「未名アル武士、手勢百騎トモ二百騎トモ、打セタル」が、〔3〕に「此勢許ニテハ、皇居ノ警固如何有ベカラント」が入る形になる。『要覧』は『太平記』の本文を大幅に省略しながら、採用すべき部分は『太平記』の詞章をほぼそのまま残して、適宜文章を継ぎ合わせる手法をとる。すなわち原文の姿を残存させつつ内容の迅速な把握を可能にしている。比較のために『太平記抜書』のこれに相当する部分を示す。「先帝ハ笠置ノ皇居ニシテ夢ノ告アリテ、楠木多門兵衛正成ヲ召ス、正成召ニ応ジテ即参ル、被頼申シテ河内ノ金剛山（ママ）帰ル」（『室町ごころ』所収翻刻、八九頁上）ときわめて簡略（約五〇字）で、原文の姿は残されていない。

中国故事や長大な説話や議論などの場面はつぎのように扱われている。巻四「備後三郎高徳事付呉越軍事」では、「天莫空勾践」の詩をあげその後に、

此詩ノ心ハ、昔呉越相戦事久シ、遂ニ勾践呉王ニ囚テ胡蘇城ニ苦ミ給フ、時ニ越ノ智臣范蠡様々智略ヲメグラシ、遂ニ呉王ヲ亡テ会稽ノ恥ヲ雪ケルヲ、思准ヘ書ケル也、

とあり、傍線部が呉越軍の故事に相当する部分である。大系本で一五頁にも及ぶ長大な説話を六〇字ほどに縮約している。因みに『太平記抜書』はこの故事についての記述はまったくない。

巻二五「宝剣進奏」で、日野資明が三種の神器の由来を問うた所、平野神社の兼員は、

先神代ノ事ヲ述テ神璽内侍所ヲ言終リ、偖宝剣ハ八岐ノ大蛇ノ尾ヨリ出テ、根元ハ太神宮ノ高天原ヨリ落シ玉ヒシ剣也、天群雲トモ十束トモ云リ、又代々ノ天子ノ御宝ナレバ、宝剣トハ申也

と答える。大系本ではこの部分、約四頁半を費やす。『太平記抜書』は「伊勢ヨリ宝剣進奏ノコト、三種ノ神祇ノ事、様々事長キ事アリ、読ニクイ也」（一二七頁下）と内容には触れず、また傍線部のように「読ニクイ」と否定的な評価を下す。このあたりには抜書編者の意識が窺われて興味深い。

巻二七「雲景未来記事」の論評の部分は「時ニ上座ノ宿老ノ山伏、雲景ニ対シテ時ノ治乱ヲ語ラレケル」ときわめて簡略である。『太平

記抜書』は雲景の記事はまったくないが、これは底本の玄玖本系統に「雲景未来記事」がないためである。

巻三五「北野通夜物語事」での三人の論者の紹介のあとの部分を引く。

連歌シケルガ、後ニハ唐ヤマトノ物語ニ成テ現ニモト覚ル事多カリキ、殊ニ元弘ヨリ已来三十余年世ノ治ラヌ旨趣、古ヲ引テ今ヲ謗リ唐ノ例ヲ挙テ我朝ノ乱ヲ悔、終夜語リケレバ、内典ノ学匠ト覚キ法師、イヤトヨ公家ノ御咎トモ武家ノ僻事トモ難申、只因果ノ所感ニテコソ候ヘ、仏説瑠璃太子事／利軍支事ヲ以テ今ヲ思フニ、臣君ヲ無シ子父ヲ殺ス事モ今生一世ノ悪ニ非ズ、皆宿酬ノ成処ニテゾ候ラメト語リケレバ、三人カラカラト笑ケルガ、

『太平記』では傍線部に相当する部分で遁世者と雲客が長大な説話（大系本で約一九頁）を語るのだが、それらはすべて省略し、三人目の論者である法師の因果論を結論のごとく扱っている。さらにこの段の末尾を「憑ミヲ残ス計ニテ頼意ハ吉野ヘ帰ニケリ」で終わった後に「此一段事繁キガ故ニ本書ニ譲ル」と、大幅な省筆の弁解めいた付記がある。『太平記抜書』は「北野通夜物語事」全体を「公家ノ衰微、武家ノ繁昌ニ付テ、和漢ノ物語長々敷事アリ」（一四九頁上）で片付けている。以上のように長い説話・故事、論評場面などを大幅に省筆して分量の軽減をはかっている。

また軍記に欠かせない人名列挙の場面などはどうか。巻六「関東大勢上洛事」の武将名をあげる場面は、

一門ニハ阿曾弾正少弼・名越遠江入道・大仏陸奥守貞直以下宗徒ノ大名／百三十二人其勢三十万七千余騎、十月八日先陣已京著

と具体名は三名を挙げるだけである。大系（一九六頁）ではこれ以外に三五名を記す。なおこの場面『太平記抜書』も大系と同じく三五名を列挙しており、加美宏氏が『太平記抜書』について「主要な事件・合戦の参加者名・日時・場所などの記述は、比較的省略が少ない。総じて歴史的な事実に即していると考えられる事がらは、限られたスペースの中で比較的くわしく抄出している」[8]と指摘するとおりである。

このほか『要覧』の記述には、まま双行書で補足的な説明をする箇所（以下〔　〕内）がある。一冊目からあげれば、「元徳元年〔案正中／元年歟〕」「二階堂〔出羽／入道〕道蘊」「舟坂山〔備前ト／播磨境〕」といったぐあいに読者の理解を容易にする注記にも心を配る。これら割注は『太平記』本文の記述に符合するものだが、第五冊目巻二一「塩冶判官讒死事」で、塩冶高貞の女房が惨殺される場面、「彼女房ハ播州陰山ト云処ニテ追手ニ拒マレ、無是非山城守宗村〔高貞／一族〕ガ手ニカケテ差殺ケリ、〔今現号甲／明神是也〕」とある傍線部は、『太平記』には見当たらず、本書編者の注記であろう。書誌の条でふれたが、歴史的な事実を記した章段の段名の下には「▲自元亨二年／四十六七年目」（巻四〇「細川右馬頭自西国上洛事」）のように、元亨二年（一三二二）を起点とした年数を書く。これも当該章段の記事の時間的位置を明確にさせる意図による措置であろう。『太平記』の中での元亨二年は、中宮御産にかこつけて関東調伏の祈りがなされた年で、本書がこの時

点を動乱の基点として捉えていることは注意されてよい。また一章段の記事が数行以下と短くても、省略せずに段名を二字下げで表記している。こうした措置は、読みづらい整版本の版面を読みやすくする。

本書の依拠本は流布本と思われる。流布本のうちのどれかについては未勘だが、巻三の最後「桜山自害事」の後に楠正成が金剛山の城を構えた由来の記事やはなく、慶長一五年刊古活字本の系統以外の本によるとは言える。因みに『要覧』の各冊冒頭の章段名を、古典大系本（慶長八年古活字本）のそれとを比較すると、以下の数箇所以外はすべて一致する。

巻二「俊基再関東下向事」　大系は「俊基朝臣再関東下向事」
　＊『要覧』の本文中には「俊基朝臣再関東下向事」。
巻三「桜山四郎入道自害事」　大系は「桜山自害事」。
　＊『要覧』の本文中には「桜山自害事」。
巻一五「建武三年正月十六日」　大系は「建武二年」。
巻一七「山門攻事付日吉神託事」　大系は「山攻事」。
巻二二「義助被参芳野事并隆資物語事」　大系では「隆資卿物語事」。
巻二七「左兵衛佐直冬鎮西没落事」　大系は「右兵衛佐」。
　＊『要覧』の本文中には「右兵衛佐」。
巻三二「神南合戦事」の前に「直冬上洛事付鬼丸鬼切事」なし。
　＊大系および『要覧』の本文中にあり。
巻三八「諸国宮方蜂起事付備前軍事」大系は「越中軍事」、『要覧』本文中も「備前軍事」　＊備前・越中どちらでも誤りではない。

四、和歌などへの興味

本書に特徴的なのは和歌・落首などをほとんどもれなく採用し、二字下げで表記している点である。煩を厭わず以下にそれらを示す。

掲載和歌・落首・頌等一覧
（＊印は落首と判定したもの、×印は『太平記抜書』に掲載なきもの、頌等の返り点などは略）

巻一　（なし）

巻二　契リアレハ此山モミツ阿耨多羅三藐三菩提ノ種ヤ植ケン（×）
　思キヤ我敷嶋ノ道ナラデ浮世ノ事ヲトハルベシトハ（×）
　陸奥ノウキ名取川流来テ沈ミヤハテン瀬々ノ埋木（×）
　昔南陽懸菊水　汲下流而延齢
　今東海道菊河　宿西岸而終命（×）
　古モカ、ルタメシヲ菊川ノ同シ流ニ身ヲヤ沈メン（×）
　五蘊仮成形　四大今帰空　将首当白刃　截断一陣風（×）
　古来一句　無死無生　万里雲尽　長江水清（×）
　＊木津河ノ瀬々岩波ハヤケレハカケテ程ナク落ル高橋
　＊懸モ得ヌ高橋落テ行水ニウキ名ヲ流ス小早河哉
　サシテ行笠置ノ山ヲ出シヨリアメガ下ニハ隠家モナシ
　イカニセン憑ム影トテ立ヨレハ猶袖ヌラス松ノ下露
　住狎ヌ板屋ノ軒ノ村時雨音ヲキクニモ袖ハヌレケリ
　思ヤレ塵ノミツモル四ノ絃ヲ払ヒモアヘスカ、ル泪ヲ

泪ユヘ半ノ月ハクモル共トモニ見シ夜ノ夢ハワスレジ

巻四

長カレト何思ケン世中ノ憂ヲミスルハ命ナリケリ

カヘルベキ時シナケレハ是ヤコノ行ヲ限ノ相坂ノ関

今日ノミト思我身ノ夢ノ世ヲ渡ルモノカハ勢田ノ長橋

逍遥生死　四十二年　山河一革　天地洞然

黒髪ノ乱ン世マテナガラヘハ是ヲ今ハノ形見トモミヨ（×）

書置シ君カ玉章身ニソヘテ後ノ世マテノ形見トヤセン（×）

ツクヅクト思暮テ入逢ノ鐘ヲ聞ニモ君ソ恋シキ

セキトムル柵ゾナキ涙川イカニ流ル、浮身ナルラン

今マテハ同ジヤトリヲ尋キテ跡ナキ波ト聞ソ悲シキ

明日ヨリハ跡ナキ波ニマヨフトモ通フ心ヨシルベトモナレ

此上ノ思ハアラジツレナサノ命ヨサレバイツヲ限ゾ

天莫空勾践　時非無范蠡（×）

巻五

（なし）

巻六

忘スハ神モ哀ト思シレ心ヅクシノイニシヘノ旅

廻リキテ遂ニ住ベキ月影ノシバシ曇ヲ何ナゲクラン

＊渡辺ノ水イカバカリ早ケレハ高橋落テ隅田流ルラン

当人王九十五代、天下一乱而（中略）、掠天下三十余年、

大凶変帰一元云々（未来記占文）

巻七

花サカヌ老木ノ桜朽ヌトモ其名ハ苔ノ下ニカクレジ

マテシバシ子ヲ思闇ニマヨフラン六ノ街ノ道シルベセン

サキ懸テカツ色ミセヨ山桜　長崎九郎左衛門師宗

／嵐ヤ花ノ敵ナルラン　工藤次郎左衛門

＊ヨソニノミ見テヤ止ナン葛城ノ高圓ノ山ノ峯ノ楠

巻八

（なし）

巻九

（なし）

巻一〇

マテシバシ死出ノ山辺ノ旅ノ道同ク越テ浮世カタラン

提持吹毛　截断虚空　大火聚裏　一道清風

巻一一

故郷ニ今宵バカリノ命トモシラデヤ人ノ我ヲ待ラン

皆人ノ世ニアル時ハ数ナラデ憂ニハモレヌ我身ナリケリ

誰ミヨト信ヲ人ノ留メケン堪テアルベキ命ナラヌニ

巻一二

（なし）

巻一三

住捨ル山ヲ浮世ノ人トハヾ嵐ヤ庭ノ松ニコタヘン

白頭望断万重山　曠劫恩波尽底乾　不是胸中蔵五逆

出家端的報親難

哀ナリ日影待間ノ露ノ身ニ思ヲカル、石作ノ花

偽ヲ糺ノ森ニ置露ノ消シニツケテヌル、袖哉

巻一四

＊賢王ノ横言ニナル世ノ中ハ上ヲ下ヘゾ帰シタリケル

＊カク計タレサセ玉フ綸言ノ汗ノ如クニナドナガルラン

巻一五

＊山ヲ我敵トハイカデ思ヒケン寺法師ニゾ首ヲ切ル、

＊二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シ新田々々シゲナ笠符哉

思ヒカネ云ントスレバカキクレテ泪ノ外ハ言ノ葉モナシ

数ナラヌミノ、ヲ山ノ夕時雨ツレナキ松ハ降カヒモナシ

ウタ、ネノ夢ヨリモ尚化ナルハ此比見ツル現ナリケリ

巻一六　＊疑ハ人ニヨリテソ残リケルマサシゲナルハ楠ガ首
巻一七　多クトモ四十八ニハヨモ過ジ阿弥陀ガ峯ニトモス篝火
　　＊山ガラガサノミモドリヲウツノミヤ都ニ入テ出モヤラヌハ
　　＊大方ノ年ノ暮ゾト思シニ我カ身ノハテモ今夜ナリケリ
巻一八　祈ルトモ神ヤハウケン影ヲノミ御手洗川ノ深キ思ヒヲ（×）
　　知セバヤ塩ヤク浦ノ烟ダニ思ハヌ風ニナビク習ヒヲ（×）
　　立ヌベキ浮名ヲ兼テ思ハズハ風ニ烟ノナビカザラメヤ（×）
巻一九　（なし）
巻二〇　（なし）
巻二一　返スサヘ手ヤ触ケント思フニゾ我文ナカラ打モ置レス（×）
巻二二　（なし）
巻二三　＊イシカリシトキハ夢窓ニクラハレテ周済計ゾ皿ニ残レル
巻二四　草モ木モ仏ニナルト聞トキハ情アル身ノタノモシキ哉（×）
　　伽毘羅会ニ共ニ契シカイ有テ文殊ノ御貌相ミツル哉（×）
　　霊山ノ釈迦ノ御許ニ契テシ真如朽セズ相見ミツル哉（×）
巻二五　少年力学志順張　得失由来一夢長　試問邯鄲欹枕客
　　人間幾度熟黄粱（×）
巻二六　返ラジト兼テ思ヘハ梓弓ナキ数ニイル名ヲゾトゞムル
　　＊憑ムカヒ無ニ付テモ誓テシ勝手ノ神ノ名コソ惜ケレ
　　＊無人ノシルシノ卒塔婆堀捨テ墓ナカリケル家作リ哉
巻二七　＊釘付ニシタル桟敷ノ倒ル、ハ梶井ノ宮ノ不覚ナリケリ
　　＊田楽ノ将基倒ノ桟敷ニハ王バカリコソ登ラザリケレ
　　梓弓我コソアラメ引連テ人ニサヘ憂月ヲ見セツル
　　ナガラヘテ問トソ思フ君ナラテ今ハ伴フ人モナキ世ニ
　　感君一日恩　招我百年魂　扶病坐床下　披書拭涙痕
巻二八　（なし）
巻二九　吉野山峯ノ嵐ノハゲシサニ高キ木末ノ花ゾ散行ク
　　限アレバ秋モ暮ヌト武蔵野ノ草ハミナガラ霜枯ニケリ
　　取ハ憂シ取ネバ人ノ数ナラズ捨ベキ物ハ弓矢ナリケリ
　　高野山憂世ノ夢モ覚ヌベシ其暁ヲ松ノ嵐ニ
巻三〇　＊君ガ代ノ短カルベキタメシニハ兼テゾ折シ住吉ノ松
巻三一　（なし）
巻三二　（なし）
巻三三　＊タラチネノ親ヲマモリノ神ナレバコノ手向ヲハ受物カハ
　　＊兎ニ角ニ取立ニケル石堂モ九重ヨリシテ又落ニケリ
　　＊深キ海高キ山名ト頼ナヨ昔モサリシ人トコソキケ
　　＊唐橋ヤ塩ノ小路ノ焼シコソ桃井殿ハ鬼味噌ヲスレ
　　帰ルベキ道シナケレバ位山上ルニ付テヌル、袖カナ
巻三四　（なし）
巻三五　＊御敵ノ種ヲ蒔置畠山打返スベキ世トハシラスヤ
　　＊何程豆ヲ蒔テカ畠山日本国ヲハ味噌ニナスラン
　　＊イシカリシ源氏ノ日記失テ伊勢物語セヌ人モナシ
　　＊畠山狐ノ皮ノ腰当ニバケノホドコソ顕レニケレ
　　＊宮方ノ鴨頭ニナリシ湯ノ川モ都ニ入テ何ノ香モセズ

巻三六　連リシ枝ノ木ノ葉ノ散々ニサソフ嵐ノ音サヘソウキ
巻三七　（なし）
巻三八　＊直冬ハイカナル神ノ罰ニテカ宮ニハサノミ怖テニグラン
巻三九　人ヤ勝神ヤ負ト暫待テ三笠ノ山ノアランカギリハ（×）
　　誰待テ三ノ浜松霞ラン我日ノ本ノ春ナラヌ世ニ（×）
　　高野山迷ノ夢モ覚ヤト其暁ヲ待ヌ夜ゾナキ（×）
巻四〇　ツカヘツヽ齢ハ老ヌ行末ノ千年モ花ニナヲヤ契ラン（×）
　　開匂雲居ノ花ノ本ツ枝ニ百代ノ春ヲ尚ヤ契ラン（×）

前述来の『太平記抜書』も和歌など韻文の採録に力が置かれ、とくに落首・狂歌の類はすべてを載せている点に特色があることが指摘されている。[9] 加美宏氏の調査に付加して『太平記要覧』での韻文類の数を示せば、つぎのようになる。

	和歌	落首	漢詩（頌）	連歌
太平記（玄玖本系）	53	27	8	2
太平記抜書	8	27	5	2
太平記要覧	55	27	9	2

『太平記要覧』は流布本を底本にしており、『太平記抜書』とは依拠本を異にするが、大まかな目安にはなろう。この数字で分かるように、要覧は和歌・狂歌の区別なく、韻文を網羅的に採用しようとする意識があったものと考えられる。『太平記要覧』で採用和歌の数が『太平記抜書』よりも増えているのは、先例故事説話の中での和歌も抄出しているのが大きな理由である。本書のこうした傾向が編者独自の考えによってもたらされたものか、それとも『太平記抜書』を意識したものかは分からない[10]が、少なくとも読者の好尚を反映した結果ではあるだろう。また、版本の単調になり勝ちな版面に、和歌の二字下げ部分を作ることにより、読者に読みやすさをもたらす働きもあっただろう。

『太平記』のような長編作品の場合、抄出本・要約本が要請されると想像されるが、具体的に残されている資料は想外に少なく、管見では小稿で触れた『太平記抜書』・『太平記要覧』の二点のみである。その両者ともに『太平記』に載る和歌・落首を高い比率で採録している点は改めて注意されてよい。

注

（1）この目録の前身は『文学』二四巻四号（一九五六・四）の特集“太平記”に掲載の釜田喜三郎編「『太平記』研究文献目録」で、それに「訂正補遺」を加えたものが、日本古典鑑賞講座『太平記　曽我物語・義経記』（一九六〇・二）所収の同氏編「参考文献」である。また古典大系の第一刷は一九六一年六月刊である。『文学』掲載の目録には『太平記要覧』の名は見えない。本書（神戸大学本）はもと釜田氏の架蔵であり、目録編纂の前後に氏の手許に入ったものかと想像したりもする。

（2）『三康図書館蔵書目録 国書編』序（一九七九・一〇、三康文化研究所）、坪谷善四郎「焼失したる大橋図書館」（『中央史壇』九巻三号、一九二四・九）。

（3）『岩瀬文庫図書目録』（一九九二・一二、三刷）二〇九頁下。

（4）これらの系図が何に依拠したかは未詳。『国文注釈全書』所収の「太平記系図」に「〇太平記之時代帝王略系図、〇北条家系図、〇新田足利之系図、〇新田之系図、〇足利之系図、〇仁木之統」が載るが、それらに比べてかなり簡略である。なお『太平記』写本では西源院本巻一巻頭目録の前に「先代九代将軍家」「桓武天皇十三代孫」が掲載されるが（筑波大学本にも）それとも異なる。

（5）『国書人名辞典』四・六五七頁上掲載の湯浅得之の号が雪任子。京都の和算家で、延宝四年（一六七六）に刊行の『新編直指算法統宗』に訓点を施した、とある。姓は異なるが、年代・地域と出版社が算術本の刊行という点で共通点が見られる。

（6）八尾市兵衛は京都の書肆で、寛文一一年（一六七一）に『新篇塵劫記』、元禄五年（一六九二）に『広益書籍目録大全』の刊行があるという（『近世書林板元総覧』六一五頁上）。川勝五郎右衛門も京都五条橋通にあった書肆で天和元年（一六八一）から元禄一七年（一七〇四）にかけて出版活動があり、貞享四年（一六八七）には『武道一覧』を刊行した由（藤原英城「獄前の都の錦―書肆川勝五郎右衛門をめぐって―」、『近世文芸』七六号、二〇〇二・七）。

（7）『太平記抜書』は写本のみで存。島原市松平文庫・小浜市立図書館・蓬左文庫・長谷川端氏、及び架蔵（高橋貞一氏旧蔵）の五本が知られる。青木晃「太平記抜書」（『室町ごころ　中世文学資料集』一九七八・九、角川書店）に翻刻（底本・島原市松平文庫蔵本）及び解説がある。

（8）加美宏『太平記享受史論考』（一九八五・五、桜楓社）二八七頁。

（9）島津忠夫「落書・落首」（『解釈と鑑賞』三四巻二号、一九六九・二）→『中世文学史論』（一九七九・一一、和泉書院）は、『金言和歌集』などにも通ずる落首などへの好尚、室町ごころ的性格を指摘する。（注7）の青木氏解説、（注8）の加美氏著書第三章第一節その一にも同様の言及がある。

（10）『太平記抜書』は室町末から近世初期の写本が多く、依拠本文が古態の玄玖本系統の写本であることからも『太平記要覧』よりは早く成立したであろうが、要覧が前者の影響を受けているとする痕跡は見出し難い。

〔補記〕

神戸大学人文科学図書館蔵本では、釜田本（四〇冊、一部に丁類本の本文を持つ）が要本であるが、それ以外に『太平記』写本一冊があり、拙著『伝存太平記写本総覧』の補遺としてこの機に紹介しておく。

架蔵番号、九一三・四三五・TAI　0202009006688　研究室配架、貴重本。巻二六のみ一冊存。紺色地に金箔草木模様（上方に小松、中に中木、下に草）入り表紙（大きさ二三・〇×一六・四糎）、左肩に題簽（一三・七×二・八糎）を貼り「太平記巻第二十六」と墨書。鳥の子紙綴葉装、わずかに虫喰あり。見返し本文共紙、前遊紙一枚、一オから巻頭目録（一つ書きなし）を書き始める。本文は漢字平仮名交の麗筆、一面九行、字面高さ約一九・〇糎、振り仮名本文に同筆。本文中の目録は一字下げ（一つ書きなし）。朱点・校合なし、奥書・蔵書印などなし。尾題「太平記巻第二十六終」（後遊紙三枚）。やや小ぶりの嫁入本の体裁で、一冊だけの零本、つれとなる写本の所在は未詳。巻頭目録を示す。

太平記巻第二十六目録
正行よし野へまいる事
四でうなはて合戦の事
付上山うち死の事
楠正行最期の事
よし野ふんしやうの事
あなう皇居の事
執事きやうだい奢侈の事
上杙はたけやま高家をざんする事

付廉頗りんしやうじよが事
めうきつ侍者の事
付秦始皇帝の事
直冬さいこくげかうの事

以上の目録による巻区分のあり方は大系本に同じで、本文は流布本系統である。

〔付記〕

資料の閲覧に際しては、西尾市岩瀬文庫・神戸大学人文科学図書館の御高配を賜りました。また釜田本についての問い合わせの手紙に対して釜田喜正氏からは懇篤なご返事をいただき、それにより神戸大学蔵本を閲覧するを得ました。関係の諸氏に厚くお礼申し上げる次第です。なお『太平記要覧』の一部分の掲載に関しては、西尾市岩瀬文庫から翻刻許可（平成二一年一一月二六日付）をいただいたことを明記し、お礼申し上げます。

〔追記〕

初校後、八戸市立図書館に本書（図一五、一五、一～八K、八冊存）が蔵されることを知った。また加賀・大聖寺の「時習館書目　貞」に本書があるが、こちらはその後身である聖藩文庫には蔵されていない（『聖藩文庫目録』一九八七・三、九五頁上）。

A Study of the *Taiheiki-Youran*

Shigeyuki NAGASAKA